幼稚園における牧場体験を取り入れた食育プログラムの開発と評価（２）

Development and Evaluation of Kindergarten Program that Includes Experience at the Ranch(2).

松　山　由美子
Yumiko MATSUYAMA

幼稚園における食育プログラムの１つとして、牧場体験を核にしたプログラムを開発した。本プログラムは、食育ではあるが、幼稚園教育要領に明記された５領域との関連を考えて多様な活動における学びが形成されるようになっている。

本稿では、松山（2015）で報告した牧場体験のその後の食育プログラムについて、そのプログラムの概要と実施した際の幼児の姿、保育者や保護者の評価について報告する。手紙を書くために文字を書きたいと言ったり、自ら牛を制作したいと言った幼児の姿に、牧場体験が、幼児の心に強く作用し幼児の表現力を高める活動へとつながることが明らかになった。食育については、調理体験への意欲は高く、また作りたいという気持ちは高いが、偏食への改善にまでは至らなかった。しかし、食育プログラム内での保育者の援助を見直すことで、調理によって得られる不思議さや探究心の芽生えを、「楽しい活動」からさらに一歩踏み込んだ活動へと発展させられる可能性があることも示唆された。

キーワード：幼稚園における食育，牧場体験，保育プログラム開発

１．本研究の背景

乳幼児期は、食習慣の基礎を確立する時期でもあり、幼稚園・保育所において食育に取り組むことは重要である。『楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～』（2004）[1] にも示された、食育の本来のねらいの１つである「食べる行為が食材の栽培といのちを育む営みとつながっていると感じる」「食べ物を媒体として人と話すことができる環境をできるだけ多く作り、自分の作ったものを味わい、生きる喜びにつなげる」体験を大事にしつつ、幼稚園で気負いなく取り組める食育プログラムの開発が求められている。

心身の成長が最も顕著な乳幼児期は、食習慣の基礎を確立する時期でもあり、幼稚園・保育所において食育に取り組むことは重要である。しかし、古郡・山口（2012）[2] によると、保育者がもつ「食育」の視点としては、「給食での指導」と「好き嫌いの改善」、「野菜の栽培」、「子どもの調理」などにとどまっていることが報告されている。また、平成20年度に大阪府食育推進プログラムが実施した「幼稚園・保育所における食育実施状況アンケート」[3] の結果からも、幼稚園での食育は増加したが、その内容は「野菜の働き」68.7%、「食事マナー」67.4%、「偏食」60.7%であったと報告があり、食育と言えば野菜、マナーなど給食を通した保育、偏食（好き嫌い）の改善と一致していることが分かる。

しかし、乳幼児期の食育については、先に示した『楽しく食べる子どもに～保育所における食

育に関する指針～』[4] にも書かれている、食育の本来のねらいの１つである「食べる行為が食材の栽培といのちを育む営みとつながっていると感じる」体験や、「食べ物を媒体として人と話すことができる環境をできるだけ多く作り、自分の作ったものを味わい、生きる喜びにつなげる」体験を大事にすること、そして「食育は、保育と同様に、具体的な子どもの活動を通して展開されるものである」というねらいを踏まえることが求められている。また、保育所だけではなく、幼稚園においても、食にまつわる具体的な子どもの活動を通して食育活動に取り組める食育プログラムの開発が求められている。

そこで、本研究では、食育に初めて取り組む幼稚園でも取り組みたいと思えるような活動にするために、初めて食育に取り組む幼稚園を実践先に選定し、幼稚園教育要領の５領域に基づく多様で具体的な子どもの活動を通して展開される食育プログラムを開発し、実践した。プログラムは、田中（2011）の小学生における牧場体験[5] の事例から、いのちを育む営みとつながっていると感じやすい牧場体験を取り入れた食育活動のプログラムを参照し、研究者と保育者が共同で開発し、実施、評価することとした。詳細は松山（2015,pp583-584）[6] を参照のこと。

２．本研究の目的と方法

本研究の目的は、食育に牧場体験を取り入れることで、幼児たちの多様な感覚をフルに活用し、食や命への興味や関心を高め、食や命の学びを形成するプログラムを開発することである。また、そのプログラムは、食育に初めて取り組む幼稚園にも気負いなく取り組めることを前提としている。そのため、幼稚園教育要領の５領域に基づくねらいと活動内容をふまえて筆者が中心にプログラムを作成し、実施する幼稚園の保育者と協力しながら実施した。なお、プログラムは2013年５月に大枠を作成したが、プログラムの活動ごとに担任保育者たちと見直し、随時、幼児や幼稚園の状況に合わせて改良しながら実施している。

本プログラムは、平成25年度（2013年４月～2014年３月）の１年間を通して、S幼稚園（大阪府和泉市）の年長児86名（うち１名は牛乳アレルギー児。搾りたて牛乳を飲む体験と、牛乳を使って作ったバターを食べる体験以外は同じプログラムを実施した）を対象に実施した。本プログラムでは牧場体験が核になるが、大阪府には中央酪農会議が酪農教育や牧場体験を学習に活用するための牧場である「酪農教育ファーム認証牧場」が存在しないため、S幼稚園から一番近い奈良県の酪農教育ファーム認証牧場である、ラッテたかまつ（奈良県葛城市）で学習することとした。

開発したプログラムの評価は、幼児たちと接している担任保育者（３クラス３名）への聞き取りや質問紙調査によって得られた回答をもとに、保育者と筆者とで協議しながら形成的に行った。さらに、保護者への質問紙調査を行い、より詳細な幼児たちの学びの姿を明らかにし、プログラムの評価の１つとした。

３．本研究の結果

研究の成果について、開発したプログラムにおける活動のねらいと実際、幼児の姿と保育者の評価及び保護者の評価（事前評価、牧場体験及び調理体験のみ）、としてまとめた。本論文では、牧場体験後の手紙を書く活動、造形活動、食育（調理）活動について報告する。なお、開発した

プログラムの全容は、Table.1のようになっている（詳細は、松山（2015,pp584-587）[7] を参照）。本論文では、プログラムの核となる牧場体験を経験した後、どのような活動を幼児が行ったか、その時の幼児の姿と保育者による評価について報告する。各活動のねらいと概要、活動時における幼児の姿、活動後の保育者の評価を明らかにすることで、本プログラムの評価の一つとして検討する。

６月：牛に関する事前学習「パネル展」と、牛についての話し合いの時間。
　　牛に親しみをもつための表現あそび
７月：紙芝居「牛乳からできる様々な製品」「牧場でのおやくそく」による学習
　　牧場体験及び調理体験（アイスクリームづくり）
　　絵日記による牧場体験の学びの振り返り
９月：牧場へのお手紙を書く
９月：廃材による牛づくり（幼児からの発案で始めた造形活動）
11月：作った牛を中心にした作品展における牛についての学びの中間まとめ
12月：調理体験（バターづくり）
３月：牧場との遠隔交流による学びの振り返り
※太字は本論文で報告する活動

Table.1　S幼稚園における牧場体験を取り入れた食育プログラムの実際

①牧場にお手紙を書く（9/4）

1.「ねらい」の設定と実際

本プログラムにおける事前学習のねらいは、牛や牛乳への興味や関心だけではなく、牛を世話し、牛乳や乳製品を作ってくれている人たちへの興味や関心を高め、感謝の気持ちをもつことである。

各クラスで「牛さんや牧場の人たちにお手紙を書こう」と保育者が話したところ、幼児は牧場体験から１ヶ月以上経っているにもかかわらず、とても意欲的に手紙を書く活動に取り組んだ。

手紙とはいえ、字を書くことができなかったり、苦手に感じている幼児もいたことから、折り紙を好きな形に切って、そこへ字にこだわらず自分の思いや感謝の気持ちなど、牧場のみなさんに伝えたいことを表現する活動にした。

手紙の形については、牧場にいた牛のなかでも幼児が高い興味を示した、額の白い部分がハート型の牛がいたことを保育者が思い出したので、ハートの形とすることにした。そこで、ハートの切り方を、線対称の概念をもとに説明したが、幼児から「他の形でもいい？」と言う声があったため、保育者は幼児の好きな形で手紙を作ってもいいと指示した。結果、幼児はハートだけではなく、それぞれが思い思いの形に切り取って楽しんでいた。

さらに、幼児への配慮として、保育者は、手紙だが字にはこだわらず、気持ちを絵で描いてもよいことを指示した。思い思いの手紙に、幼児はそれぞれ「ありがとう」など言葉を書いていた。最後に、それぞれが何を書いたかをクラス全員の前で発表し、この活動を終えた。

Fig.1　牛に手紙を書く

Fig.2　歩いて文字を探し出す

Fig.3　牧場に送った手紙

Fig.4　たくさんの「ありがとう」

2.幼児の姿に対する保育者の評価

3クラスのうち2クラスで、普段自ら字を書こうとしない幼児が「自分で『ありがとう』と書きたい」と言い出し、それぞれ、保育者に「『あ』ってどう書くの？」とお手本を書くように聞いたり、参与観察していた研究者や近くにいる友達に聞いたり、さらには保育室の中に「ありがとうの『あ』が分からないから『あ』の文字を探しに行く」といった行動が見られた（Fig.1～4参照）。

このような幼児の姿について、その2クラスの保育者は「鉛筆を持たせたので字を書くという意識はあったと思うが、ここまで書きたいという意欲があったことはない」とのことで、自分で書きたいと思うほど、牧場の牛や牧場の人たちへの感謝の気持ちが高まっていたという評価をしていた。もう1つのクラスでは、1人だけ絵で描いた幼児がいたが、全員での発表の時に「牛さん優しくて嬉しかった」と発言できたことを認めて、字は書けていないが気持ちの高まりを感じたと評価していた。

この活動を通して、線対称の図形に気づくことや自分の思いを伝えるために文字を書くことも意識はしていたが、「手紙を書いて思いを伝えたい」という心の育ちを保育者は高く評価した。

②　廃材による牛づくりと作品展（9月～11月）

1.「ねらい」の設定と実際

この廃材による牛づくりは、本プログラムでは設定していなかった活動である。保育者によると、9月中旬からの設定保育の造形活動で「何をつくろうか？」と幼児に聞いた時に「牛をつく

りたい」という幼児が複数いたので、「牛をつくりたい子はつくっていいよ」と保育者が応えたところ、徐々に他の幼児から「僕も」「私もつくりたい」という声があがったので実施したとのことであった。

この活動では、「廃材でつくりましょう」ということだけ約束として提示したのみで、幼児一人ひとりに自由に制作させることにしたとのことであった。幼稚園では造形の専門の先生が指導に来ているが、今回の牛の絵及び作品は専門の先生の指導は受けていない。そのような状況で、幼児が工夫して作っている姿を保育者はおよそ１ヶ月にわたり援助していった。

幼児からの声で始まった活動であったため、ねらいは、幼児が思いを形にすること、工夫して表現することの楽しさを味わってほしいというものであった。そのため、幼児に何か指示することはせず、幼児１人ひとりの作品へのこだわりや思いをしっかりと受けとめ、聞き取ることを大切にしたとのことであった。

作品展については、S幼稚園では毎年テーマを決め、クラス全員で取り組むようにしており、すでに夏休み頃から保育者が計画していた。そのため、作品展で展示するための造形活動を２学期の設定保育に組み込んでいた。しかし、３名の保育者たちは、牧場体験後に描いた絵日記と称した牛の絵と、９月以降の幼児１人ひとりが工夫を凝らして思いを形にする牛の作品を見て、これも作品展に組み込もうと話し合って決定したとのことであった。さらに、毎年の作品展と違い、この牛の絵を描いたきっかけや思い、作品に見られた幼児のこだわりや工夫を、今までの活動を紹介した文章に添えて、１人ひとりの作品を展示することにした（Fig.5参照）。

2.幼児の姿に対する保育者の評価

幼児から声が出てきて活動が始まったことに、今回の牧場体験が幼児１人ひとりの心の中に強く感動として残っているのだと保育者も研究者も感じた。つくられた作品の牛の表情がとても優しく、笑っている牛ばかりであったことや、乳搾りをした経験から、牛の乳をていねいに、また工夫して表現しているようすや、幼児なりに牛のお腹の近くに行き乳搾りをした時に感じた牛の大きさを表現しているようすなど、幼児の経験から得た思いが表現に工夫されていることが、どの作品からもよく見て取れた（Fig.6参照）。

保護者からも「牧場での体験がただ楽しかっただけではなく、表現に表れるほど思いを深めて

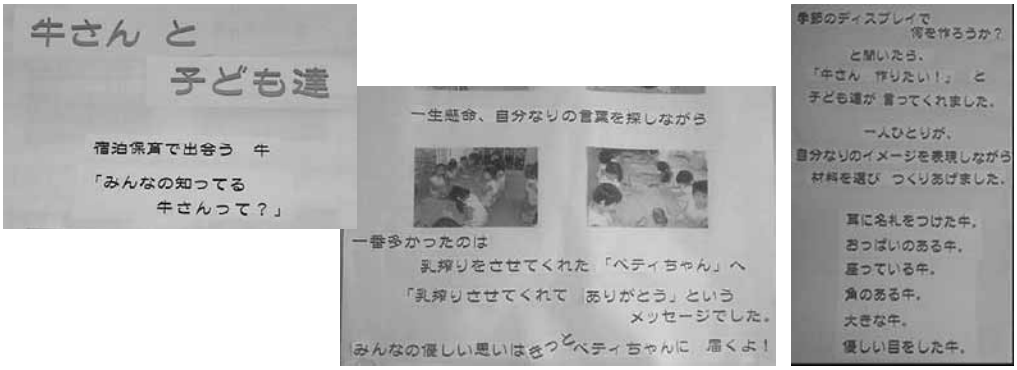

Fig.5　作品展での掲示物（一部）

Fig.6　牛の作品と幼児

いたことがよく分かった」「牧場に行くことで先生たちがどう考えていたのかを知れてよかった」と高く評価されたことを保育者たちもとても喜んでいた。

③調理体験（食育）バターづくり（12/5）

1.「ねらい」の設定と実際

保育者が「牛さんから牛乳をいただいたけど、どうしよう？」と投げかけ、幼児と大事な牛乳でバターを作るという案で活動した。牛からもらった大切な牛乳という思いを大事にしながら、牛乳や乳製品について、調理体験を通して、より牛乳や乳製品への関心を高め、飲んだり食べたりすることに興味をもつ、さらに、調理体験を友達と協力して行うことや、牛乳からバターができる不思議さを感じてほしいというねらいを設定した。

手作りバターは振る作業が大変なうえ、日持ちしないため作りすぎると消費できないことや、衛生面の問題も考慮し、グループ活動にすることで、その場で食べ切れる量を協力して調理することとした。そこで、５～６人のグループで１つのペットボトルを協力して振ることで調理すると仮定し､何度も園長､担任保育者と研究者で材料の配分について実験し検討した。結果､パスチャライズ牛乳120ccと生クリーム（動物性・脂肪分35%）80ccを混ぜ、最後に塩を少量入れて作ることとした。

容器は、幼児が持ちやすいもの、バターができる過程が見やすい透明のもの、強く振ることが予想されるため割れない素材のもの、かつ衛生的にも問題のないものという４点を考慮し、使いきりのペットボトルを購入した。

2.幼児の姿に対する保育者の評価

幼児には「牛さんの搾りたてに近い特別な牛乳」としてパスチャライズ牛乳のことを伝え、材料と手順を説明した。どのクラスの幼児もしっかり聞くことができていた。また、実際の調理体験も一度夏にアイスクリームを作った経験もあり、グループで協力して振る順番を決めたりしながら活動していた。

疲れず楽しめるように、振っている間、保育者は音楽を流すかピアノを弾いて励ますことにしていたが、グループ活動で交代しながら振ったことや、保育室での初めての調理体験ということ

Fig.7　バターづくりのようす

Fig.8　ホエイに興味を示す幼児たち

Fig.9　バター完成

Fig.10　グループで試食

もあって、音の必要はなかったと保育者が感じるぐらい元気に振っていた。机の周りを1周しながら振り、リレーのように走って振りながら楽しく調理するグループもあった。

急いで振らないと手の熱でうまくいかないと全員が感じていたこともあり、観察についてはじっくりと時間が取れたグループと取れなかったグループができた。そこで、音楽を止めて保育者が各グループを巡視することができるようにしたことで、「今どんなようす？」「音はどんな音？」と声をかけることができ、幼児も、ペットボトルの中の音や色などに関心をもつことができた。

１つのクラスではホエイに興味を示し、「においが牛乳みたい？」「飲みたい！」と言う幼児が出てきたため、ホエイを飲む活動もバター試食の前に加えた。他の２クラスでは、ホエイを処理した後であったため、興味をもった幼児もいたが飲むことができなかった。

作ったバターはクラッカーに塗って全員で試食した。全員が「友達と一緒に作った」「自分も一生懸命がんばって振った」ということで、満足なようすであった。幼児は、味だけではなく「バターふわふわ」「黄色より白い」と感触や色も楽しんでいた（Fig.7 ～ 10参照）。

保育者からは、評価よりもまず、バターづくりが初めてで、事前の教材研究がもっと必要であったという意見が出た。「まずは全員で楽しく安全に調理ができて、おいしいと思える」ことを第

一に考えて援助に入ったこともあり、観察への時間配分や、他の乳製品についての興味や関心を広げるような視点は意識していたものの、保育中に具体的に援助することは難しかったと振り返った。事前のより丁寧な教材研究の必要性を確認しあった後、牧場体験の時に見せた紙芝居『牛乳からできるさまざまな乳製品』の話との関連をもっと持たせればよかったという反省も出た。

作ったバターを「もったいない」と気持ちを伝え合って食べたり、ホエイが飲めなかった幼児が悔しそうな表情をして残念がっていたことから、牛に感謝をする気持ちだけではなく、バターの色への興味の高まりも幼児が感じていたことを保育者と研究者で共有した。しかし、そこから調理活動そのものへの感謝までは発展させることはできなかったと評価した。この点については、調理中の観察について保育者がもっと意識を向けて援助することで発展も可能ではないかと考えられた。今回既に、保育者が慣れてきて余裕が出てきた頃からは、「一緒に見てみよう」と観察や音を聞くことへの興味や関心に幼児を少し誘導できたことを振り返り、次年度はより観察に意識を向けて、科学的な観察力を基礎にした探究心の育成へもつなげたいという結論に至った。

また、保護者の食育への意欲が高まっている姿が感じられ、その気持ちが幼児から得た可能性も高いということで、幼児の調理への興味や関心も広がっているのではないかと推測された。

バター作りについては、保護者へのアンケートも行ったため、その結果も評価の一部とする。

保護者アンケートの結果から、このバターづくり体験で幼児に身についたと思われることは「バターが牛乳から作られるという知識」という結果が多く、次いで「友達と協力して活動する楽しさ」「料理の楽しさ」「不思議さ・探究心」であった。分量や特別な牛乳の名前（パスチャライズ牛乳）のこともしっかり記憶していて、家でも「バターを作りたい」と話した幼児もいたことが明らかになった。また、アンケートの空白部に今回の食育のレシピとホエイについてのミニコラムを掲載したが、その部分を切り取ってアンケートを提出した保護者も数名見られた。さらに自由記述欄には「牛乳で子どもと一緒にできる料理をもっと教えてほしい」「幼稚園の畑で獲れた野菜でピザを作ってはどうか」などといった、食育に対する意欲的な意見も見られた。

「食への感謝」については、回答が少なかったが、自由記述欄で「特別な牛乳で作ったから大事に食べたと話していた」「腕がすごく疲れたけど最後まで一生懸命振ったことを話してくれた」といった回答も見られ、幼児なりに「食べ物を大事にしよう」「食事に感謝しよう」という気持ちはあったことが感じられた。

しかし、「嫌いな食べ物を克服する力」といった項目への回答はほとんど見られなかった。この活動でバターを残した幼児はいなかったことから考えると、バターとしては食べることができたが、それが牛乳を飲もうという意欲にまでは発展しなかったようであった。さらに、「料理の大変さや苦労」といった項目への回答もほとんど見られず、自由記述を見ても楽しかった話（疲れたけど楽しかったという話も含む）しか見られなかった。食育という観点では、楽しかったがもう一歩踏み込んで自ら考えるところまでは至らなかった点において、保育者の評価とほぼ同様の結果が保護者アンケートからも見られた。

④遠隔交流による学びの振り返り活動「牛さんともう一度会おう」(3/7)

1.「ねらい」の設定と実際

卒園式を２週間後に控えた頃に、牛と再会することで、１年の学びを思い返し、牛乳や乳製品について興味や関心を思い出してほしい、牛や牧場への感謝の気持ちだけではなく、卒園してからもさらに興味や関心を広げたり深めたりしてほしいというねらいを設定し、インターネット電話サービスの１つであるSkypeを用いて、幼稚園と牧場間での遠隔交流を行った。

S幼稚園がSkypeを導入することも初めてだということだけではなく、保育現場でメディアを活用することそのものが小学校以上と比較してもかなり否定的で導入が遅れている（小平,2007）[8] ため、この活動に対して幼児がどういう反応を示すか、保育者も幼児の姿を予想しにくかったようである。したがって、ねらいを設定する段階でも、「幼児は覚えているとは思うけどどういう反応を示すか」「音声や映像が途切れて幼児ががっかりするのではないか」など、さまざまな意見が園長や保育者、研究者にはあったが、園長の「一瞬だけでもつながったら、思い出がよみがえって幼児は嬉しいと思う」という言葉に、保育者たちも、回線がうまくつながらなかった時のことを想定し、準備を進めていった。

Skypeは、年長児全員で試聴できるように幼稚園の遊戯室に設定した。牛や牧場の人たちに成長した姿を見てもらおうということで、製作物などの写真を用意し、OHCで映すことや、歌で感謝の気持ちを伝えようということになっていた。電源の関係やメディア操作が得意な保育者がいなかったことから、製作物などの写真はカメラの前に保育者が持って行って写すことにしたり、スピーカーをパソコンの音声用とキーボードの音声用とを２台配置し、別個に管理することにしたりした。音声はパソコン上のものと幼児の声とを制御するため、簡易ミキサー付きスピーカーを使用した。webカメラは三脚に固定できるタイプのものを使用し、写真なども映しやすくした。

映像は幼稚園のスクリーンに映し出し、全員で見ることができるようにした。

牧場とのSkypeということで、園長と研究者が牧場に行き、タブレットを牧場では使用することにした。インターネット回線は、幼稚園の職員室に導入されている回線を無線LANで職員室の隣の遊戯室で受けることができるようにした。牧場では研究者のスマートフォンをテザリングして通信回線を確保した。牧場側の回線速度の遅さや、幼児の集中力を考えて、15分間の交流に制限することにした。

幼児には、「今日は牛さんと再会するよ」と話をして遊戯室へと誘導した。さらに、「ありがとうって言うだけ？」と保育者が問いかけながら、今年度１年間の牧場体験を核にした全ての活動をもう一度思い起こさせることで、幼児の興味や関心を高めようと工夫した。その１つとして、Skypeがつながるまでの間、牧場体験前に見せた紙芝居をもう一度読み、思い出すための援助も行った。披露する歌の練習も集中力が増した。

Skypeがつながり、園長がスクリーンに表れると、幼児たちは手を振って喜んでいた。牧場で乳搾りを手伝ってくれたおじいさんや牛との再会を15分の交流の間で楽しんだ。

2.幼児の姿に対する保育者の評価

今回の活動について、遊戯室に誘導する前から、幼児は「会いたい！」「ありがとうってまた

言いたい！」と、とても楽しみにしていたと保育者へのインタビューから明らかになっている。Skypeについても、家庭で祖父母とのテレビ電話などを経験している幼児もいたが、「どうやって会えるん？」と、幼児が再会に興味や関心を高めていたことも明らかになった。

最初は回線がつながらず、保育者が『牧場でのお約束』など、今までに読んだ紙芝居を読み聞かせたり、全員で手あそびを久しぶりに楽しんだりしてつながるのを待っていた。しばらくして園長がスクリーンに映った時には、幼児から大きな歓声が起こった。

しかし、一番歓声があがったのは、乳搾りを教えてくれて、一人ひとりに付き添ってくれた牧場のおじいさんが映された時であった。幼児にとって、楽しかったけど少しどきどきして怖かった体験をそっと隣で支えてくれた牧場のおじいさんの存在がかなり大きかったことが明らかになった。

牧場からの回線速度が遅いために、映像が止まったり音声も聞き取りづらかったこともあったそうだが、幼児は一生懸命、聞き漏らさないようにと集中しておじいさんや園長のお話を聞き、元気に答えていた。おじいさんが「(乳搾りの仕方を）覚えてますか？」と聞いた時、幼児の中から自然と「パー・ギュッ・1・2・3 ！」と、乳搾りの掛け声（松山,2015参照）が聞こえ始め、幼児全員の大合唱になったことは、そこにいた大人たち全員が驚き、感動した瞬間となった。

園長とおじいさんとで、乳搾りをさせてくれた牛（ベティちゃん）に会いに牛舎に向かう間も、「そこの階段を上がるねん」「懐かしいなあ」「そっち曲がったらアイスクリーム作ったところ」「ポニーは元気ですか？」と、幼児が約半年前の記憶に支えられた思いを本当に嬉しそうに話していた。牛のベティちゃんに会えた時には「牛にも聞こえてるから大きな声はあかん」とお互いに注意しあい、声の大きさに気をつけて話していたことも明らかになった。

夏にはいなかった子牛の誕生や、見難いはずのスクリーンからより詳細に牛の模様やようすを観察し言葉に表す幼児の姿に、15分と限定せずに、臨機応変にもう少し時間を取ればよかったという保育者の反省も後に見られたほどであった（Fig.11,12参照）。

予定通り15分でSkypeを切断したが、盛り上がりすぎて歌を歌うところまで進まず、「歌えへん

Fig.11　Skypeで再会

Fig.12　集中してスクリーンを見ながら手あそびを再現

の？」という幼児の声に「歌おう」「牧場に届くように歌おう」と歌を歌って遠隔交流を終えた。牧場の人たちも初めての遠隔交流に驚いていらっしゃったが、最後には本当に楽しかった、よかったとおっしゃってくださった。

遠隔交流体験では、幼児の「もっと牛を見たい」「もっとお話がしたい」「もっと成長した姿を見て欲しい」という気持ちが随所に言葉や態度で表れた活動になった。なかでも、園長とおじいさんが牛舎の階段を上りだした時の「あの臭いまで伝わってくるなあ」と言った幼児の声は、その場の全員が笑った印象的な一言であった。遠隔交流でも臭覚や触覚も思い出させるほど、幼児にとって心に残った牧場体験であったことが、牧場のおじいさんと遊戯室に集まった幼児と保育者全員で共有できたことに、この遠隔交流を行った意義があったと思われた。実施時期を考えると、ここで興味や関心を高めても幼稚園でさらに援助する活動を組むことは難しいし、幼児の牛や牛乳・乳製品への興味や関心がさらに高まったかを追跡調査することも困難である。しかし、牛や牧場、牛乳や乳製品に触れる度に思い出すような心に残る体験であり、その体験をより深めることができた遠隔交流であったと思いたいという保育者たちの思いがインタビュー全体から感じられた。

４．本研究のまとめと課題

牧場体験後の活動を５領域に対応した「ねらい」から振り返ると以下のようにまとめられる。領域「健康」においては、牛について学び、牛や乳製品への興味や関心は活動を重ねるごとに高まったと考えられる。手紙を自分の言葉で書こうとした意欲や、造形表現をしたいという思い、食育活動への意欲的な態度など、幼児が自ら楽しんでさまざまな活動に取り組むことができたことは、牧場体験を通したからこそであると言えるであろう。

領域「人間関係」においては、牛や牧場の人たちの気持ちを考えて行動する思いが、表現活動や食育活動を通して充分育っていただけでなく、年間を通して持続できていると考えられた。また、食育でのグループ活動についても、幼児が自ら話し合って協力しており、とてもよくがんばっていたと評価した。さらに、聞き取りづらかった遠隔交流中のおじいさんの声を一生懸命静かに聞き取ろうとする姿は、夏に構築した人間関係を維持しようとする意欲の向上そのものだと思われる。

領域「環境」においては、食育活動中にホエイにまで興味や関心をもった幼児もいたことから、牛乳が乳製品に変化することなどへの興味や関心は高まったと考えられた。この素朴な幼児の思いをより深めたり広げたりするためには、保育者の援助が重要であると保育者の間で再確認された。

領域「言葉」においては、感謝の気持ちを文字で伝えようとする姿や、文字を教えあおうとする姿が見られた。文字にこだわらなくとも、全員の前での発表ができたことからも、言葉が自分の思いを表現し、他者に伝えるためのものであると幼児が実感できたと評価した。また、遠隔交流では、聞く力も育ってきていると確認された。

領域「表現」については、牧場体験を楽しんだ思いをじゅうぶんに造形活動で表現できたと評価した。自分らしく表現することだけではなく、自ら考え、工夫することも学んだと考えられる。

本研究で開発した牧場体験を核にした食育プログラムを実施した結果、牧場体験を楽しかった体験で終わらせずに、自ら「つくりたい」と思える表現活動に至ったり、手紙を書く活動や調理活動についても、「文字を書きたい」、「バターを作りたい」という新たな興味や関心を強くもつことができたと思われる。特に、保育者や研究者が想定した活動以外に幼児から発案され発展した活動が見られたことは、大きな成果であった。牧場体験を含む年間を通した食育プログラムが、幼児にとって心から楽しみ学ぶことができるものであったからだと思われる。最後に遠隔交流を実施したことで、幼児の興味や関心が持続していたことや、またこの交流で興味や関心が改めて高まったことも明らかになった。

遠隔交流については、今回の遠隔交流を実施した保育者たちが「こういう可能性があるのならメディアの保育への導入もいいと思う」「ぜひまた来年もやりたい」と語り、大きな意欲を見せたことも成果として挙げられる。幼稚園や保育所でのICT活用は小学校以上の導入と比較しても格段に少なく、否定する保育現場が圧倒的に多いことが知られているが、実体験と融合した活用であったことと、幼児の興味や関心、意欲の高まりを可視化できたことが、保育現場で肯定された重要な要因であると思われる。保育者へのインタビューでは他にも、卒園に向けての意欲も高まったこと、大きな感動を年長児全員で共有できたことが、肯定の要因として大きかった。

最後に、牧場体験を核とした食育活動を進めるなかで、保育者のみならず保護者が、変容する幼児の姿を通して、幼稚園の教育について高い興味や関心を示しており、それが幼稚園での教育をより豊かにする可能性があることも明らかになった。保護者の食育に対する興味や関心の高さは、先述した保護者アンケートでの自由記述の例だけではなく、「ホエイがもったいないので、ホエイを使った簡単な調理活動までお願いしたい」などの意見も出たことから、保育者と研究者との反省会では、次年度はさらなる調理活動を含めた食育の充実を共通の課題として認識できた。

本プログラムの改善を目指すことが、本プログラムだけではなく、幼稚園での保育活動のさらなる充実と、幼児の生きることへの興味や関心を高めるための保育の工夫や改善につながることとなった。そして、保護者の思いも取り入れながら保育者と研究者がよりいっそう連携して保育に取り組むことが、幼児の興味や関心をより高め、充実した保育を行うために重要であることも示唆された。

本研究は、一般社団法人Ｊミルク 平成25年度「食と教育」学術研究「幼稚園における牧場体験を取り入れた食育プログラムの開発と評価」（代表：松山由美子）による研究の一部である。

＜引用・参考文献＞

１）厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課長通知（2004）『楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～』（平成16年３月29日雇児保発第 0329001 号）p.3.

２）古郡曜子・山口宗兼（2012）「幼稚園における食育カリキュラム作成に関する基礎的研究－幼稚園教諭へのインタビュー調査を通して－」『北海道文教大学研究紀要』第36号 23-34.

３）[おおさか食育通信―健康栄養情報] 大阪府食育推進プログラム「平成20年度 幼稚園・保育所における食育実施状況アンケート」結果（2014.03.31参照）
http://www.osaka-shokuiku.jp/kenkoeiyo/kenkoueiyou_media/20nen_condition02.pdf

4）厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課長通知（2004）『楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～』（平成16年3月29日雇児保発第0329001号）2-3.
5）田中博之（2011）「牧場での体験学習活動が、児童の意識や行動に及ぼす教育的効果の検証」社団法人中央酪農会議酪農教育ファーム推進委員会.
6）松山由美子（2015）「幼稚園における牧場体験を取り入れた食育プログラムの開発と評価」『四天王寺大学紀要』第59巻 583-597.
7）松山由美子（2015）「幼稚園における牧場体験を取り入れた食育プログラムの開発と評価」『四天王寺大学紀要』第59巻 583-597.
8）小平さち子（2007）「幼稚園・保育所におけるメディア利用の現況と今後の展望」『放送教育と調査』6月号：64-79.